No.129
公民館だより
平成19年3月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

手紙

由良地区公民館長　飯澤　登志朗

拝啓、M様その後如何お過しですか。

今冬は記録的な暖冬とのこと、由良岳も山頂が少し白い程度です。また、雪不足で例年大勢の観光客で賑わう雪まつりの開催が危ぶまれていると報じられています。

以前M様が特別養護ホームに入所されていると聞き、面会に伺ったことがあります。

事務所で来訪した趣旨と面会したい旨告げましたが、現在不在で会わすことは出来ないとの返事でした。不在の理由を尋ねると入院中とのこと。そこで入院先とどんな病気なのか聞きましたが言えないとの回答でした。

個人情報保護ということで仕方なく当日持参していた「公民館だより」にその場で書いたメモを付けて渡してほしいとお願いしたところ、いつ渡せるか分からないが一応お預りすると受け取ってくれました。

その後雑用に追われる毎日で案じていましたが、思いがけず年賀はがきをいただきました。

M様からの年賀はがきは字は多少弱々しくなったように思いますが、九十歳を過ぎた方とは思えない達者な文が綴られていて安心しました。

机上に「日本一短い母への手紙」（大巧社）があります。

手紙コンクールの入選作品が載っていますがその一つ。

「お母さん、もういいよ。
病院から、お父さん連れて帰ろう。
二人とも死んじゃ、いや。」

四十四歳女性の手紙です。

入院中の父親と介護に疲れた母親を気遣っての手紙ですが、短いこの手紙から家族の強い愛情が伝わってきます。

最近は手紙を書くことが少なくなりましたが、今年の年賀はがきに「あけおめ。」こんな内容のはがきがありました。

M様お分かりですか。

あけましておめでとうを短く「あけおめ」と書くのです。

孫からの一通ですが何か複雑な心胸です。

映画にもなりましたが、東野圭吾原作の「手紙」を読まれましたか。

二人きりの兄が弟を大学に入れてやりたい一心から、盗みに入った屋敷で人を殺し懲役十五年。

それ以来月に一度獄中から手紙を書き、犯した罪を詫びながら弟に進学を勧めますが「強盗殺人犯の弟」というレッテルによって幸せはすべてその手をすり抜けていくのです。

戦前「赤紙」といわれた召集令状も手紙の一種だったのでしょうか。この通知によって戦場に散った人も多くあります。

すべてが電話で済む時代ですが、手紙の持つ温かさをいつまでも大切にしたいと思います。

花の便りが届くのはまだまだ先になりますが、お身大切にご自愛ください。

敬具

行事報告

主事　磯田充亮

◎十一月三日（金）文化の日
文化祭

今年も由良婦人会と協賛で開催しました。又、裏千家「淡交会」の協力を得て会場にお茶席をお世話になりました。

屋外では「輪なげ」コーナーを設けました。

会場は子供からお年寄りまで幅広い出展があり、作品で溢れかえっていました。

今年は京都府立大学学外演習で来られていた学生さんの作品「由良岳の自然」「由良の宝物」のパネルに足を止め見入る人たちが多く見受けられました。

出展数（出展者数）

習字（書道含む）	76点	（62人）
絵画	41点	（41人）
写真	24点	（10人）
生花	21点	（21人）
ポスター	21点	（21人）
ちぎり絵	12点	（7人）
カレンダー（パソコン使用）	8点	（8人）
絵本	6点	（6人）
砂絵	6点	（6人）
その他	14点	（14人）

作品は196名の応募があり総数229点が展示され、昨年と同じ約700名の方が訪れました。

◎十二月三日（日）
第二十四回市民卓球大会

市民体育館で行なわれた大会に由良チーム（五名）として参加し、優秀な成績を残しました。

○団体の部　B級　三位

○個人の部

女子A級優勝　日比道栄さん

男子C級三位　中西一義さん

◎十二月二十三日（土）天皇誕生日
「子供ふれあい活動」
子供料理教室

今年も宮津市食生活改善推進委員協議会（食改）の皆様の指導を受け、由良子供会連絡協議会との共催で「子供料理教室」を開催し、クリスマスケーキ作りに挑戦しました。

小学生三十四名（男十七名女十七名）、幼稚園児三名（男一名女二名）の参加で始めました。

ケーキは昨年より一回り大きなスポンジケーキを使用しました。昨年の経験者が率先して教え、形も良くきれいに飾り付けることができました。

作業前には手洗い等衛生面にも気をつけたり、食器やテーブル等の後片付けを手伝う等協力的な面も見受けられました。

昼食後、四年生以上に今日の作業について感想文を書いてもらいました。内容を一部簡略して後頁に掲載します。

◎一月十三日（土）
卓球教室開催

今年も生涯スポーツの普及と健康づくりの推進の一環として、冬場に適した卓球教室を開催しています。

毎月、第二・第四土曜日

午後一時三十分から

由良の里センターで開催

三月末まで開催する予定です。

昨年は五回開催し述べ八十七名の参加がありました。

◎一月二十一日（日）
新春公民館囲碁大会

今年は参加者が少なく四部対戦が困難になり、初段以上（A組）、一級以下（B組）に分かれ、参加者十一名による個人のリーグ戦を行ないました。

結果は次のとおりです。

A組

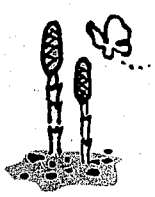
優勝　中西　衛　四段

準優勝　今西　秀夫　二段

B組

優勝　岸田　勇　三級

準優勝　西の上熊吉　二級



環境大臣賞を受賞して

由良小学校長　倉野　英明

十一月六日、校長室で仕事をしていると、

「環境省から電話です。」

と、連絡が入りました。何事かなと思い受話器を取ると、地球温暖化防止活動に関わる環境大臣表彰の内定通知でした。これはあくまで内定であり、正式な受賞発表は、環境省のホームページで十一月二十日に公表するため、それまでは口外しないようにということでありました。

そういえば、以前（夏休み中）、市役所に行った時、本校の環境教育に中心的に指導・協力をしていただいている宮津市の環境保健室の中山さんから、この間の由良小学校の取組を高く評価しており、府の地球温暖化防止活動推進センターと相談し、環境大臣表彰に応募したとの話を思い出しました。しかし、その後、上げた提出文書が府との手続き上のミスで、うまく国の方へ行かなかった旨の話がありました。学校としても、もとよりそんなたいそうな賞をもらうつもりもなく、ああそうですかと聞き流していました。

それが、環境大臣表彰を受賞することに決まり、大変うれしく思うと共に正直、賞に見合うだけの教育を行ってきたかなというとまどいもありました。

十二月十一日の表彰式は、東京のＫＫＲホテルでありました。宿泊した所から地下鉄の大手町で降り、皇居の堀沿いに歩き、前が気象庁、横が商社の丸紅といった高いビルが立ち並ぶ中にありました。会場に案内されると、多くの受賞者と随行員、報道関係の人たちであふれており、窓越しに皇居がよく見えました。

式典は、部門毎に行われ、最初は、技術開発や対策技術、対策活動等に対する表彰が行われました。多くは、名前をよく聞く大企業でした。本校は、環境教育普及・啓発部門での表彰で、若林環境大臣から表彰状と記念品の目録を受け取りました。その後、記念写真や会場を変えてのレセプション等があり、多くの方と環境についての話や学校の取組等、軽食をとりながら交流しました。

では、受賞の栄誉に浴することとなった本校の取組ですが、地球温暖化について学習を行うきっかけになったのは、平成十二年に、省エネルギー教育推進モデル校の指定を受けてからです。指定期間が過ぎてからも宮津市エコネットワーク（市環境保健室）がコーディネーターとなり、京都府の温暖化防止活動推進センターや丹後広域振興局、企業の研究員、地元の山田さん等の協力・支援の下、五年生の総合的な学習の時間に三十時間ぐらい使い、教室での講義や製作、地域に出かけての自然体験活動や見学等を行ってきました。

これは、平成九年に地球温暖化防止会議で、温室効果ガスの各国の排出量の数値目標を定めた、京都議定書の採択地である府内の小学校として、また、地球温暖化による深刻な被害が予想される、日本三景の一つ天橋立を持つ市内の学校として、地球規模の環境問題に関心を持ち、身近な所から防止活動に主体的にかかわることをねらいとしています。

●第一回テーマ

「温暖化と私たちの暮らし」

＊温暖化のメカニズムと影響についての話

・このまま温暖化が進むと地球上においてどのような影響が出るか、資料や図、ま

た、映像等を使っての説明。
＊自転車による発電体験
＊自分達にできる温暖化防止対策

●第二回テーマ
「温暖化と自然エネルギー」
＊自然エネルギー（水力、風力、太陽光等）についての話
＊風力発電模型の作成

●第三回テーマ
「温暖化と森林・バイオマス」
＊温暖化と森林の関係についての話
＊森林保全活動体験
・振興局、市環境保健室、森林組合、里山の所有者、企業の研究員等多くの協力の下、地域の山に入り、森林が人々の生活や地球環境に役立っていることや、森林保全に関するなどの学習
・里山に入り、木の伐採・集材作業
・集めた木を学校で粉砕機によりチップにして乾燥

●第四回テーマ
「木質ペレット製造と風力発電の見学」
＊木質ペレット製造体験
・伊根町の森林組合の施設で木質ペレット燃料製造機の工程を見学
＊風の学校で係員による自然エネルギーの説明と風力発電施設の見学

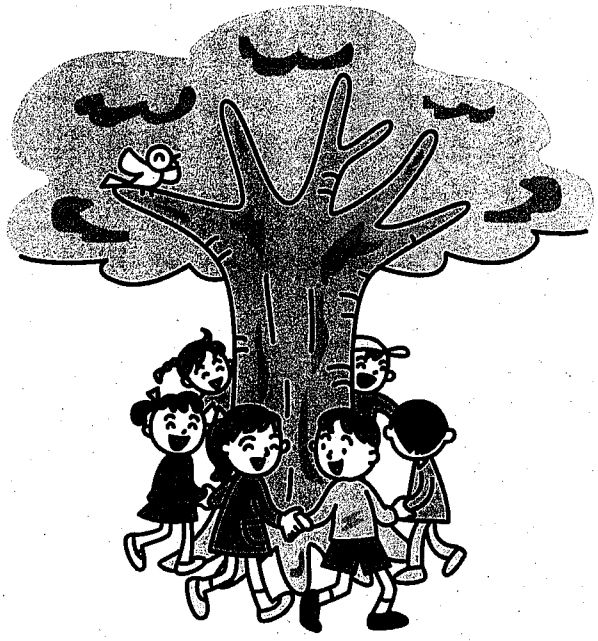
●第五回テーマ
「まとめ」
＊バイオマスについてのまとめ
＊温暖化防止活動についての理解度の確認
＊環境問題と活動を行っての感想と実践例についての話し合い
・この間、府温暖化防止活動推進センターの調査研究事業の一環として、同センター所有のペレットストーブを借り、教室で冬期間使用
・教室に測定箇所を設け、エネルギー消費量と室温の関係等を温度計を使っての調査と石油ストーブとの比較

●第六回テーマ
「温暖化防止のため、取り組んでいることの発表」
・個々の児童たちが、家庭等で気をつけたり、がんばっていることの発表

本校では、上記のように多くの方々の協力・支援を得て、環境教育に積極的に取り組んでいます。

昨今、新聞も環境にかかわる記事が毎日と言っていいぐらい載っていますし、何か異常気象があると、すぐ温暖化の影響とか言われます。実際、南極や北極の氷が溶け出しているとか、氷河が年々小さくなってきていることが報告されています。

今後は、五年生だけでなく、すべての学年で、環境について学習し、保護者や地域と協力し、今日的課題、温暖化防止に少しでも貢献し、環境を守る取組を進めていきたいと思っています。



「子供料理教室」

クリスマスケーキ作りに参加して

（四年生以上の感想文を簡略して転記）

六年　礒本ちなみ
・ケーキのかざりつけがうれしかった。

六年　北野　雅基
・どんなケーキが作れるのかと思ったけど、おいしいケーキが作れて楽しかった。

六年　千坂　尚義
・なれない作業でこまったことがあった。みんなで協力しておいしいケーキができた。

六年　中西　崚
・ケーキ作りはむずかしかったが上手にできたしおいしかった。

六年　中西　幸雄
・今回二回目だった。ケーキがくずれて見た目はぜんぜん、味はおいしかった。

六年　日比　昌成
・作ってみたたのしかったし、おいしかった。

六年　前畑　俊樹
・ケーキがうまく作れたし、おいしかった。卓球たのしかった。

六年　矢野　安希
・ケーキは、くだもの切りをした。おいしくできてよかった。

六年　由利みさき
・なにもやってないけどケーキがさいごまでできてよかった。

六年　吉元里香子
・おいしかった。見かけはあまり良くなかったが味はよかった。六年生最後にいい思い出ができた。

五年　足立　涼
・ケーキづくりがうまくいった。ひるごはんもうまかった。

五年　大森　美沙
・みんなと協力してケーキ作りができた。友達といっしょに良い体験ができてよかった。

五年　岡野　えり
・班に分かれてケーキ作りスタート。ひとりでせずにほかの人にもさせたほうがよい。見た目は？　味はとてもよかった。

五年　岡本　昇磨
・初めてで不安、どんなになるかと思ったが味はおいしかった。

五年　浜本　もも
・たのしかった。おもしろかった。ちょっと失敗があったけどホイップクリームがうまくできた。一、二、ようち園たちと遊んでかわいいなーと思った。

五年　前畑　直人
・ケーキにクリームをぬるのがむずかしい。自分で作ったのでおいしかった。

五年　吉岡　和輝
・おいしかった。クリームをぬるのがたいへん。できはわるかったけどおいしかった。

四年　牛田　朔太
・最初は不安だった。食べてみかんがすっぱかった。来年もいきたい。

四年　大森　ゆめ
・自分で作ったのでおいしい。ホイップがあまり上手にできなかった。昼ごはんもとてもおいしかった。

四年　白矢　貴大
・ケーキがうまくできた。自分で作ったからとてもおいしかった。ピラフもおいしかった。

四年　立井　愛実
・最初はかん単かなと思ったがけっこうむずかしかった。あまくて美味かった。また作りたい。

四年　中西亜里沙
・去年も来たけど今年のほうがおいしかった。昼ごはんもおいしかった。家でも作りたい。

四年　枡岡　佑奈
・ケーキ作りは前よりたいへんになったけど味はおいしかった。ホイップクリームは、チョコ味にした。また作りたい。

四年　吉岡　諒亮
・ケーキの作りかたがよくわかった。おいしかった。

戦時中の青春

浜野路　大森　孝

(一)〝阿片戦争の歌〟の頃

舞鶴一中の三年生となって、二年生から『下東』などの農家へ勤労動員として、学校を出て強行軍で歩き切って、念仏峠を越えると、予約してあった農家の主人が待ち受けていた。一組が分れて田圃を耕して、当時は貴重な米飯を腹一杯頂戴して、再び定刻までには母校に帰り着いていた。

こんな農家の支援のような体験がもう一度あって、三年生ともなると戦局の急迫は学窓にあっても安気にして居られず、近くの宮津商業学校や、最も早く始まった峰山工業学校に続いて、本校三年生は九月より海軍工廠第二造兵部（舞鶴市倉谷）へ学徒動員として就労することになった。昭和十九年九月一日に始まった工廠の爆雷製造には、動員してみて驚いたことには、舞鶴市内の余内小学校高等科（当時は国民学校七年生、八年生）の児童も就労していた。製缶部へ廻された班の級長は矢原君という、それこそあどけない顔立ちのまだ残る少年だった。学童までもが。

私たちは軍人組（軍人志望コースでクラス分けされていた）はこの爆雷の「風袋」を作る部署であって、余内小学校卒業生と藪崎組には私の外、金加君と荻野君等が入れられ、外には奈良女高師の臨教の家庭科の生徒が三名程入っていた。

いわゆる、軍人組はその後、電気溶接部署に移った末次正雄君（次の昭和二十年三月二十八日より、海軍兵学校針尾分校の七部へ入った）達のグループが出来てきた。

因みに、三年生の中、高専組（上級学校志望の一組は機械部署で、峰山工業学校の生徒と作業を共にしており、就職組と呼ばれた舞鶴一中を卒業して、就職して社会へ出る生徒達→二組の人たちは器材部署へ就労していた。各人それぞれ、作業上の悩みと自身の人生を生きていく上での志望とのギャップがあって、その落差との大きさの間で戸惑いを毎日感じ続けたことだろう。今一つは、年頃の中学生達だったので、人恋しさは一入であった。昭和十九年冬期を迎えての伊佐津の工員宿舎入寮しての起き伏しはただならぬものがあって、私にとってはかなり辛いものであった。とまれ、時代の波と偕に流れるしかなかった。

製缶工場という喧騒と汚染された内部の大気が、私の志望する海兵への身体検査に支障を与えないよう、「ガン」「ガン」鳴り響く、鉄板の裁断と鍛造作業に加えて、『ピカッ』『ピカッ』と光る電気溶接の溶接棒が電流の流れて溶けて光る閃光から、聴覚と視覚を自ら護りぬかねばならず、来る日も来る日も、軍学校受験の為の体調維持が最優先の大前提になった。それでも、そんな最も劣悪な作業環境の中にあっても、私は国のために役立っているという思い、国の要請に応えて励んでいるという、いわば誇りは、かえって喧騒を極め、常に不規則な電気溶接の閃光の飛び交う製缶工場を行き交う間にあってこそ、つまりは器材部署や機械部署の静謐そのものの他の部署よりは高揚したものがあった。製缶工場の就労の方が第二造兵という軍需工場の中では、高い調子で、戦争を援けているという自信であったし、自負であった。

そんな中で、情報統制が進ん

でいた昭和十九年の海軍工廠の中で、どうしても解せないものが一つあった。それは毎日鉄板（爆雷の容器の上羽根部分か？）を裁断する水圧プレス機（工作機械）の後下部には、スエーデン製造のメーカーの金属板が印されており、さらには爆雷の頭部となるお椀形の半球状の部分（これは水圧プレス後、電気溶接をする）を造るのが、何と今や敵国となった英国のグラスゴウの工場で作られた工作機械であった。

私は地理学に特別に興味と関心をもっていたので、容易にスエーデン鋼が刃物として優れて鋭利であることは首肯できたのだが、問題は後者のグラスゴウ製の水圧機の卓越した高性能と、そんな先進工業国を敵として戦っているということの現実と厳しさであった。いけるのか。果して、英国や米国を超えられるのか？　第二造兵部には、この製缶工場の西の片隅に、たった二基が据え付けられていて、私も懸命に、兵器の部分として造っているのだが、敵国は量的に、質的にどれだけ造り続けているのだろう。この二基の水圧機から出てくる鉄の部品を見続けながら、昭和十九年の年も暮れ、あけて昭和二十年の三月二十八日に、海軍兵学校予科として、佐世保の針尾分校へ入校する迄、こだわり続けた。なぜ国産の工作機械を据え付け得られずに、英国の重工業の発達しているグラスゴウの機械に頼って、飛行機より落す、うちの爆雷が作られているのだろうか。反問はすれども、そこは海軍工廠の中の話、曰く問い難く、且言い難しであった。

そんな、昭和十九年の暮れに慈悲深かった私の祖父吉助が死去。私は伊佐津の寮で必死で迫りくる十二月十九日からの江田島海軍兵学校受験のための学習に血眼になっている。時たまたま疾風怒濤のようにやってきた私の思春期の大試練。幼い時からの夢でもあり、究極の人生の目標であった海軍士官になること。このことの為には、あらん限りのことをする。敢えて挑む。手探りにも似た暗闇の中学三年生の二学期を揺さぶった歌が幾つかあった。若い心はそれらの旋律に解放を求めて傾き、酔ってゆくのに暇はかからなかった。

一つは突如歌い出されて、またたく間にひろがっていった、『あゝ紅の血は燃える』であった。その一節

『花も蕾も若櫻　五尺の生命
ひっさげて　国の大義に殉ずるは　吾等学徒の本分ぞ!!
あゝ紅の血は燃ゆる』

往時は思春期特有の多感な高揚の共感もあって、忽ちこの整

った歌詞と旋律に囚われてしまった。そうして、その鼓舞の調べに共鳴していった。

ところが、ここにもう一つあって、七十七歳の今日にして、今以て口をついて出てくるのは、何と国策映画であった〝阿片戦争〟という映画の主題歌である。これの方が、今で言う癒しの効能があるというのか、一節も二節も殆ど頭に刻まれていて、人づてに耳から覚えた。片方が目の不自由な姉妹の登場する、つまりやるせない歌であるのを諳んじている。不思議といえば不思議である。おかしなことである。

確か、東舞鶴では浮島劇場でかゝり、舞鶴でも舞鶴映画劇場で上映されていた。けれども私は映画館の入り口のポスターを見ただけだった。心の中は海軍兵学校への受験のため、数学と物象（物理と化学が併さって？）を主として、専ら日曜とて受験の準備にあてていた。（心の中の臨戦体制を維持し続けようとしていた）映画の話は、東舞鶴から舞鶴一中へ通学していた瀬野君あたりが、倉谷工場へ朝出勤する時の集合地点『二ツ橋』（大内地区公民館前）西詰めで、前日観てきた映画のあらましを語っている。処は華南であり、姉妹のうち片方は目が不自由である、広東は日本の占領下にあって、香港と共に私達にも耳なれた大都市である。私にとって、イメージを膨らませ、感情移入で親しみのある土地とするのは、上海や蘇州同様に、さして困難ではない。

映画〝阿片戦争〟の主題歌。

(一)風は海から吹いてくる!!
沖の戎克（junk）の帆を吹く風よ。情あるなら教えておくれ。私の姉さん、何処で待つ。

◇　◇　◇

(二)青い南の空見たさ……
姉と二人で幾山越えた
花の広東、夜霧の街で
悲しく別れて泣こうとは!!

息苦しい位の戦争の中にあっても、少年は生き続けねばならず、生長発達を続けねばならず、与えられた条件と限られた環境を工夫して、昭和四年生れは生き抜いてきたように思われる。

(二)〝蘇州夜曲〟と〝誰か故郷を思わざる〟の歌の頃

『いつ迄続くぬかるみぞ』…これは日中戦争初期の軍歌のワンフレーズだが、昭和十九年は全くの閉塞感の中を、何者かに追い立てられるように世の中が推移して行く。そうして、宮津線より舞鶴一中へ通学している生徒は伊佐津の工員宿舎へ収容されて、二ツ橋集合で、倉谷の工場へ就労するようになった。私は十二月十九日に広島県江田島の海軍兵学校講堂での受験に総てを収斂させて、工場での耳をろうせんばかりの激しい騒音や汚染された建物の中の大気の中を、自律した健康保持のスタンスで切り抜けた。私には子供の時から抱いている一生涯の夢である。その夢を叶えるためには、工場で易々として崩れてはならない。海軍士官になることが本質であって、就労時の出来事で本質が損なわれてはならない。

朝礼が終ると、すぐに耳に綿栓をして作業に就き、作業時の通行時も、ほとばしって光る電気溶接の閃光には必ず背を向けた。怪我とか負傷を回避しながら。宿舎へ引揚げて緊張がとけて我にかえった時間には、思春期を揺さぶる想いが、蘇州夜曲の旋律となって、口の端にのぼってきた。

とりわけ二節目は諳んじた。

花を浮べて流れる水の
明日の行方は知らねども
今宵うつした両人の姿
消えてくれるないつ迄も——

これは恋の究極の詩だと感銘して、折にふれて憧れの気持ちをうたった。また、憶えているのは、

『水の蘇州の花散る春を
惜しむか柳がすすりなく』

このフレーズは一節だったか。

翌年、三月二十八日に海兵予科に入校成就する迄に、日曜日に由良の我が家へ帰省して、帰寮の時間が迫って乗車。夜空の星を仰ぎながら、西舞鶴の駅を降りて、伊佐津の田圃道を急ぐ。ここは池や水溜まりが随所に見られる。水蒸気が立ち上っている。

マントを肩から羽織って、家からのみかんや餅をしっかり持ちながら、立ち止まって自分をいとおしみ、傍、勇気を奮い起して寮舎への道を歩ませるのだった。私にとっての恋心は戦争下に突如として、海軍工廠でやってきた。(中学三年生)その後、戦中を通じて増幅し、深まって行った。もう一つの歌にも心酔して、落ち込んだ時などに口ずさんだ。その歌とは、

花摘む野辺に陽は落ちて
みんなで肩を組みながら
唄をうたった帰り途――
幼馴染みのあの友、この友
あ、誰か故郷を思わざる

この調べは、海兵入校前の舞鶴市伊佐津の田圃道のほとり、涌泉や池のふちで、想いを燃やしながら憧れと感傷にひたった旋律であった。恋する対象がいる限り、敗戦後も二年あまり歌い続けた。それはまた、自分を支えた大切な歌に違いなかった。同時に、現在の私にとって、これらの歌を口ずさんだ当時は、かけがえのない命の輝いた夢多い時期だった。

(平成十八年七月十八日記)

川柳

流れ来るハングル文字も椰子の実も　大森　美智子

秋思とやゼブラゾーンで佇ち止まる

情報の渦に巻かれて生きている　坂本　妙子

洒洒落落癒して呉れる友が居る

輪の中で肌合いの差を知る孤独

ケセラセラ一途な若さ今は夢

短歌

初めてのディーゼルカーにはしゃぐ孫　亀井　久太郎

早い早いと行きつ戻りつ

三才になったばかりの孫娘

独りで遊ぶ仕草おかしく

玉葱の苗を植え付け振り向けば

引き抜き遊ぶ孫が居るなり

経ケ岬から潮岬まで（最終回）

四方　俊一

五月六日（水）午前六時、夜もすっかり明けていた。旅の最後の日、天候は曇り「潮岬」に向って出発。この新宮市には駅から五分の所に「秦徐福墓」がある。

その昔、紀元前三世紀、秦の始皇帝に方士（仙術者）として仕えた徐福は皇帝の命を受け、不老長寿の霊薬を求めて渡来したと伝える。この時徐福は、大船八十五隻に数千の童男童女、金銀珠玉、五穀、器財を分乗して、蓬莱という島に向かって船出した。長い航海の果てに辿り着いたのが、熊野蒲であったという。

現在の阿須賀神社のあたりが上陸地点といわれ、その背後の蓬莱山には、徐福が採取したという「天台烏薬」と呼ばれる薬草が生育している。その後も徐福は、従者らとともに熊野にとどまり、土地の人々に耕作や捕鯨術を教え、ここで天寿を全うしたと伝承されている。

徐福伝説は各地に残されているが、身近な所では伊根町の新井崎にあり、地元の厚い信仰の元に祀られている。

新宮市の徐福の墓は、徳川頼宣元和五年（一六一九）家康の十男（紀伊入封）が建てたもので、そばの七塚は、徐福に殉死した七人の重臣の墓であるという。

新宮駅北西一キロの所に「熊野速玉大社」が河口の近くにある。本宮、那智とともに熊野三山の一社で、別名「熊野新宮」。また「熊野権現」とも称し、昭和二十一年の制度改革の際、正式名を「熊野速玉大社」と改めた。その他にも「阿須賀神社」がある。

また「東くめ」の有名な鳩ポッポの歌碑、「佐藤春夫」詩碑がある。明治二十五年、新宮市船町の医家に生れた詩人で数多くの詩を作った。新宮市はまだまだあるが足は次へ向っている。

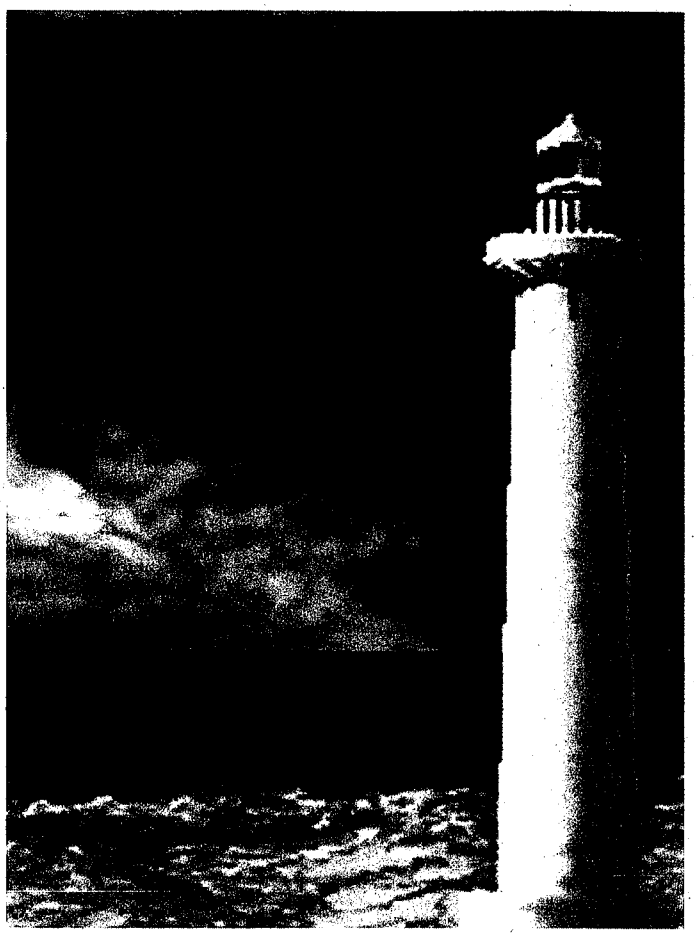
午前八時には那智勝浦町の紀伊勝浦に着いた。古くから熊野那智大社の門前町として発達し、勝浦は熊野参詣にともなう温泉町として開かれた所。江戸時代は、新宮に居城した紀州藩の付家老水野氏三万五千石の治下にあり、廃藩置県後の明治四年七月、新宮県に属したが、十一月和歌山県の設置で同県に編入された。

町域は、北部に烏帽子山（九〇九米）大雲取山（八七一米）峰山（八七九米）の諸山が連なり、これに源を発する那智・大田の両川が、南東流して熊野灘に注いでいる。その大部分が山地と丘陵地、海岸部は典型的なリアス式海岸で、大小の島々を配した見事な海岸風景を展開している。

町の産業は、温暖多雨、長日照の気候に恵まれて、農林業が盛んである。野菜、かんきつ類、茶などの栽培が行われ、生産量も高い。

また、勝浦、宇久井、浦神の三港は天然の良港で、熊野灘に絶好な漁場をひかえている。各港はそれぞれ特色をもち、勝浦港はマグロ、カツオ漁の根拠地。宇久井港は商港として整備されており、パルプ原材料の入荷をはじめ、砂利、木材などの出荷が盛んである。

東京、勝浦、高知間を結ぶ高速フェリーが寄港して、南紀の海の玄関口の役目を果たしており、浦神港はハマチの養殖などで活況を見せている。熊野信仰の大霊場と、白浜と並ぶ温泉郷をひかえて観光産業も盛んである。



そして左をとれば「太地町」、あの「鯨の街」といって過言でない街であり、日本捕鯨発祥の地として知られている。

慶長十一年（一六〇六）にこの地の和田頼元が鯨をモリで捕殺する「刺し手組」を作ったのが組織的な捕鯨業の始と言われている。現在は商業捕鯨の禁止により、太地湾において追い込み捕鯨を行うのみである。

国道四十二号、熊野街道（大辺路）を西南に足を早める。左手は黒潮返す太平洋・熊野灘、道路はＪＲ紀勢本線と交互しながら続く、「大辺路」とは「海辺の道を周廻する」と言う意味であり、山中の修行路を「中辺路」と言うことは成り立たないが、紀伊の辺路修行路を熊野三山巡りに置き換えられた段階で、山中の修行路を中辺路と呼び、海岸線を回る辺路は本来のものとして大辺路と呼ばれた。「中辺路」は熊野街道紀伊路の田辺から山間部を経て熊野本宮に至る道のことである。左は黒潮流る太平洋熊野灘、右は熊野那智大社に至る道、太田川沿いに那智山（妙法山）に至る那智勝浦本宮線県道四十五号線である。

海岸側から那智駅から観光バスで登る那智勝浦線、県道四十三号線があり、多くの人はこの道を利用する。「熊野那智大社」那智山の中腹、標高五百米の高台にあり、ここが有名な熊野那智大社で、熊野速玉大社（新宮市）、熊野本宮大社（本宮町）とともに、熊野三山と呼ばれる。

那智大社は何時頃創建されたかについては不明であるが、神武天皇が那智大滝を神体として祀ったという伝説も残っており、社歴が相当古いことに変りない。つまり那智大滝を神と崇める自然信仰から発生したと伝えられる。

古来熊野の地は紀南の霊場として発展したが、隔絶した地理条件もあって、奈良時代までは微々たる存在であったが、平安時代に入ると観世音菩薩の補陀落浄土に擬せられ、無病息災・長寿延命を願う参詣者が多くなってきた。

また、中世神仏習合思想が盛んになると、熊野の地は阿弥陀浄土であり、ここに詣でれば極楽往生が可能だと宣伝され、熊野信仰は急速な発展を示した。ここを根拠地としたのは修験者たちで、全国に熊野信仰の功徳を説いて歩いたのは先達・熊野比丘尼という人たちであった。

一方御師（祈祷師）は、先達に導かれてきた参詣者の祈祷・宿主などの役に携わった。熊野詣でで特に有名なのは「熊野御幸」と呼ばれる朝廷関係の参詣である。

延喜七年（九〇七）宇多法皇がその始めとされるが、以後白河上皇、鳥羽法皇、崇徳上皇、

後白河法皇、後鳥羽上皇、後嵯峨天皇、亀山天皇などの参詣が記録に残り、なかでも後白河法皇は三十三回を数えている。

又、鎌倉時代以降は武士、江戸時代に入ると庶民の参詣が相次ぎ「蟻の熊野詣」という盛況を示した。

現在境内には青岸渡寺があって神仏習合の名残をとどめている。三山の社殿中最も簡単で仏教建築の色彩が濃いといわれている。天正九年（一五八一）織田信長の兵火で焼失後、豊臣秀吉が再建し、嘉永四年（一八五一）に大改修を加えたものである。大社の主神は熊野夫須美大神で、家都美御子大神と御子速玉大神を合わせて熊野三権現という。

紀伊田原駅前で昼食をとり古座町に向う。「古座町」は古座川の河にひらかれた町で、江戸時代は紀州の熊野代官お目付役所が置かれた所で、捕鯨を主とする漁港として発展し、藩の鯨方役所もあった。

地勢は北、西、東の三方は山岳地帯で、南東は熊野灘に臨み、古座川の河口付近に狭小な平坦地がひらけている。

町の主産業は農林漁業である。キュウリ、トマトの促成栽培や、ポンカン、ミカン園の経営が行われている。林業は木材加工業が盛んで古座川を利用して集められる木材の集散地であった。漁業は沿岸漁業が主である。

また観光地として、吉野熊野国立公園内の景勝地九龍島・荒船海岸などがある。九龍島は古座川河口約一キロ沖に浮かぶ小さな島であるが周囲は海食を受けて、無数の洞穴があり、熊野水軍の根拠地であったところである。

古座神社から古座川に掛かる大橋を渡ると目的地潮岬まで目と鼻の先に来た。時計は午後二時、ＪＲ紀伊姫駅を過ぎると交通量は増加してきた。危険を避け歩道を歩く。右手は紀勢本線、次は串本駅。左手海側に名勝、天然記念物「橋杭岩」が見えてきた。

串本町の北東端の海岸から大島に向かって大小四十余りの奇岩が一直線に並ぶ。第三紀層の貝岩に地震による裂目が出来、その裂目に石英粗面岩が噴出して岩脈となった後、柔らかい貝岩が海食され、堅い石英粗面岩だけ断続して残ったものである。その岩脈は大島まで達している。

橋杭岩を過ぎると串本の町並である。「串本町」は和歌山県の最南に位置する。

町域は、東西に細長い形をしており、海岸寄りをＪＲ紀勢本線と国道四十二号線（熊野街道）が走っている。中心市街は潮岬と本土を結ぶ砂州上に立地している。砂州の長さは約九百米、巾五百米でその東側に串本港があり対岸には大島がひかえている。大島は民謡「串本節」で知られている。

町の産業は漁業と農業が主である。漁業では沿岸漁業地として発展したが近年資源枯渇のためマダイ、ハマチ、ヒオウギ貝などの浅海養殖漁業の開発に力を入れている。農業では大島ミカン、キンカンなどかんきつ類の産地として知られている。

また、吉野熊野国立公園、熊野枯木灘県立自然公園があり、潮岬・大島の二大観光地がある。

街並を抜けて潮岬まで四キロ余り、和歌山県の最南端に突出した小半島、東京都の八丈島とほぼ同緯度で、本州では最南端に位置する。潮岬は、火成岩の作り出した高さ六十米前後の隆起海食台地である。

まずは最南端に向う。芝生広場を横断して茂みの中の道を行くと、目の前に経つ白亜の灯台。「潮岬に灯台あれど恋の闇路は照らしゃせぬ」と串本節に歌われた潮岬灯台である。潮岬南西端の、険しい断崖上に建つ。白色円形の灯台で、高さ一九・六米、光達距離は三十五キロに及

び、光度八〇万カンデラで一等灯台に指定されている。潮岬は気象通報や台風情報でも馴染みの所で、沖合いの流れが早く、風も強く、昔から航海の難所として知られるが、船舶の安全はこの灯台に負うところが大きい。明治三年（一八七〇）イギリス人ブランドの指導により初点灯という歴史をもち今日も暗夜の海に光を放ち続けている。

あの向うは、海の彼方はアメリカ大陸だ。やっとの思いで遂に達した。日時は一九八七年五月六日（水）午後五時、四月二十八日、経ヶ岬を午後一時出発してから八日半で五百キロの行程を歩いた。国道を、府道を、県道を、山路を歩き、近畿の北端から南端まで歩いた。

幸いにも好天に恵まれ、健康に恵まれた、可能な限り経費を節約して天幕持参の旅は歩く身に荷物になるが、何処でも好きな場所で、路肩で、公園で、神社境内に設営できた。

当初、足は絆創膏だらけであったが、京都市に入る頃には無くなっていた。昔の人は歩いた。しかも何百里、何百キロと歩いた。不便な時代、「旅」は昔も今も人の心を捕らえる。「経ヶ岬から我家まで」が長じて「経ヶ岬から潮岬まで」に変った。しかも「近畿縦断」を成し得た。単純に歩くだけ。ただひたすらに歩くだけ。しかし未知の景色が展開する、人の情が感じられる、人の親切が、……だから歩く「旅」は興味が涌く。親から貰った二本の足、よくぞ歩いた……と我足を誉める。

この「旅」にご協力いただいた皆様と家族に感謝し「経ヶ岬から潮岬まで」を終りとします。

蜂子皇子

山下憲弥

(一) 蜂子皇子の時代背景

時は第三十一代用明天皇の御代である。この天皇の前後数代にわたって倭国（日本国）にとっては、内憂外患交々至る激動の時代であった。まず、外患の方では第十五代応神天皇が朝鮮半島に出兵して、半島南部の任那を勢力下においていた。（植民地としていた）ところが新羅が台頭してきて、しばしば任那に侵攻し、第二十九代欽明天皇の御代に任那は滅ぼされてしまった。以後、代々の天皇は任那を回復すべく兵備を整え、新羅とは緊張状態にあった。

内憂の方は欽明天皇の御代に朝鮮半島の百済から仏教が伝来し、日本固有の民族宗教である神道と対立し、それに有力氏族間の権力闘争が絡んで騒々しい時代であった。仏教受容派（崇仏派）の中心は、代々大臣（古代の最高職）を勤め、大和朝廷の財政、外交を掌握していた蘇我氏であった。蘇我氏は外交を掌握している関係から外国の事情や文化に明るく、当時の進歩派であった。他方、排仏派の中心は代々大連（古代の最高職）を勤め、軍事・司法を掌握していた物部氏であった。対立激化の結果、排仏派が仏像を堀江に捨て、寺を焼き払うというようなこともあった。物部氏は今の言葉で言えば保守派であった。

用明天皇の父は欽明天皇で母は蘇我稲目の娘、堅塩媛である。（以後、系図を参照されたい。）

母の妹、小姉君の娘、穴穂部間人皇女を皇后に迎え、厩戸（聖徳太子）、久米など四名の皇子をもうけたが、即位して僅か二年余りで崩御した。用明天皇が崩御すると物部守屋は皇位を狙う穴穂部皇子（用明天皇の異母弟）を押し立てて狩猟を名目に軍を動かそうとした。この謀が事前に洩れたので蘇我馬子は炊屋姫尊（後の推古天皇）を奉じて佐伯連丹経手らに詔して穴穂部皇子の宮を囲み殺害した。そこで残る標的は物部守屋となり、蘇我馬子は泊瀬部皇子（後の崇峻天皇）厩戸皇子（後の聖徳太子）らとその群臣に働きかけ、大兵力を動員することに成功した。他方、物部一族は孤立を余儀なくされたが、果敢に戦い、連合軍を三度まで退却させた。厩戸皇子は仏に祈ることを思い立ち、霊木に四天王（仏法の守護神）を刻んで誓を立てた。それは、戦に勝利できたら必ず四天王のために寺院を建立するというものであった。誓の効き目があってか、間もなく守屋は討たれ、物部軍は散り散りになって逃走した。誓願に従って乱が鎮まった後、摂津国に四天王寺が建立された。

第三十二代崇峻天皇は欽明天皇の第十二子で、母は大臣蘇我稲目の娘、小姉君である。大和の倉梯に宮を造営した。

「元年の春三月に大伴糠手連が女、小手子を立てて妃とす。是蜂子皇子と錦代皇女とを生めり。」（日本書紀）

蜂子皇子の記述は日本書紀のみで、古事記には記載されていない。皇子の名前が出てくるのは伝承、伝説に類する書物である。

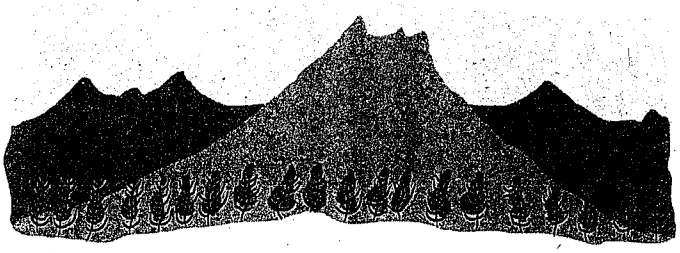
当然のことながら政治の実権は蘇我馬子に握られた。系図でお分かりのように蘇我氏は皇室の外戚となっており、近親結婚で姻戚関係は複雑に絡み合っている。当時の皇室は信仰面では蘇我氏と同様、熱心な崇仏派であった。王権を軽視し、政治を欲しいままにしている馬子に対して、天皇は次第に反感を抱くようになった。同天皇五年十月猪を献上する者があった。このとき天皇は猪を指さして「いつかは、この猪の首を斬るように自分の嫌いな男を斬ってやりたいものだ。」と語った。これを聞きつけた馬子は身の危険を感じて、翌十一月部下を使って天皇を殺害した。任那再興のため新羅を討つべく大軍を築紫に向わせた留守を狙った犯行であった。天皇の政治は五年十一ヶ月であった。この後、第三十三代推古天皇（女帝）が即位し、甥の厩戸皇子を立てて皇太子となし、国政全般を任せた。ここから聖徳太子の政治が始まるのである。

古代社会に関心をもってもらうために余分の記述を行う。当時の皇室は近親結婚が多く異母兄妹、叔父と姪、従弟同士の結婚は通常のことであった。また、一夫多妻が認められていた。ここに示した系図の中だけでも敏達天皇と推古天皇、用明天皇と穴穂部間人皇女、舒明天皇の両親は、いずれも異母兄弟である。

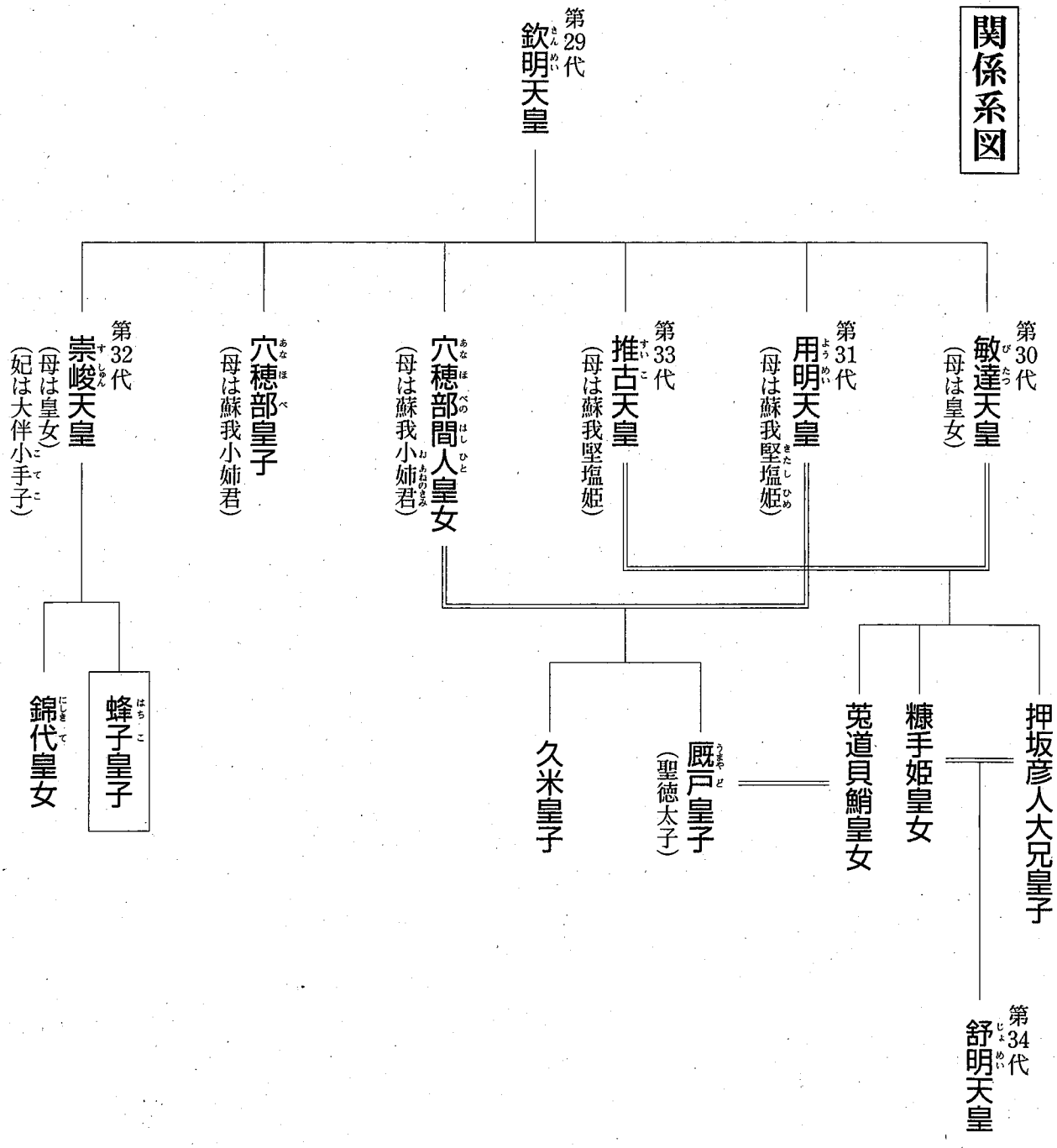
当時の皇位継承順位は、いろいろと論じられているが、大胆にまとめれば原則として次のようなことになる。母の出自が重要条件である。第一順位は皇女、第二順位は有力氏族の娘、それも姉と妹では大きな格差があった。蜂子皇子の母は大伴氏の出身である。皇女の母をもつ皇子はたくさんいる。その上、大伴氏は保守派である。たとえ崇峻天皇が平穏な生涯を送ったとしても、蜂子皇子の皇位継承の目はなかったと思われる。

以上は一応、歴史上の事実として容認されている資料をもとに記述してきた。次回は蜂子皇子の伝承、伝説について詳述する。

余談になるが、由良山如意寺の開祖として伝承されている麻呂子皇子（椀子皇子）は、父は欽明天皇、母は蘇我堅塩媛であり、用明天皇、推古天皇の実弟で、崇峻天皇の異母兄である。蜂子皇子の叔父にあたる。古代の二人の人物が奇しくも丹後由良に伝承されているのは不思議な縁である。憶測すれば夢が広がる。



関係系図



崇峻天皇暗殺余話

三森　明

崇峻天皇が暗殺された。遺児の蜂子皇子が由良を経て山形の羽黒山に逃れた伝説は、すでに知られています。

天皇を弑したのは、大臣蘇我馬子の命を受けた東漢直駒だがこの後、馬子により殺される。

蘇我馬子

暗殺の黒幕、馬子は政敵物部氏との戦いに勝ち、聖徳太子と手を結び強大な権力を握るが、馬子の孫、入鹿が皇位継承争いから太子の子、山背大兄王を討ち太子一族を滅してしまいます。

この事件に父の蝦夷は「大馬鹿者め！　お前の命も危ないものだ!!」と激怒したという。

入鹿の専横に批判的な中大兄皇子、中臣鎌足は反蘇我勢力を結集して蘇我家打倒を謀ります。

六四五年、大極殿に三韓の使者を迎える儀式の時、皇極女帝の御前で入鹿は襲われる。

古来より入鹿は皇位を傾けようとした悪人として、伝えられているが、学窓旻師の塾に通いその学識は旻師も称えており、専横だけの人物ではなかった。との説もあります。

現代では、黒岩重吾氏の小説「落ち目の王子」で主人公として登場する等、悪人像が見直されてきました。

入鹿の死を知った蝦夷は館に火を放ち、自害する。

翌年、新政策が発表された。大化の改新です。

中大兄皇子
（後の天智天皇）

中臣鎌足
（後の藤原鎌足）

崇峻天皇暗殺から五十三年、黒幕の一族は滅亡して、やゝ強引ですが、由良と古代史最大のクーデター大化の改新との関わりも、あるようで興味深い。

五十年目の真実（Ⅲ）

（文豪三島由紀夫と丹後由良そしてポッポ屋（鉄道員）修さん）

藤沢市　平間　武

・磯野修三（いその・しゅうぞう）昭和五年三月十九日に生まれる

修（しゅう）さんは、昭和十七年に由良高等尋常小学校を卒業後、すぐに国鉄に奉職し三年間、西舞鶴駅勤務の後、地元丹後由良駅に駅員として配属された。

以来二十四年間、修さんはその持ち前の明るさと面倒見の良さで丹後由良駅の人気者となり、地元の人にとっては、そこに居なくてはならない存在となるのである。その駅を利用する常連の乗降客は朝に夕に修さんのその笑顔に触れる度に、何故か明るく爽やかな気分にもなり、その日一日を心穏やかに過ごすことができるのであった。その駅舎の中からホームに至るまでの温かい雰囲気は、実は修さんの荒削りに見せながらもきめ細かい思い遣りの心が織りなすものであったのだ。とにかく修さんは誰からも「修さん！」「修さん！」と親しまれる丹後由良駅の名物駅員であった。

昭和三十年十一月十一日、そんな修さんの目の前に突然、作家・三島由紀夫が現れることになるのである。

その日、三島は駅前の「日の出旅館」（本文中では駅前の海水浴御旅館由良館）で宿泊の手続きをとることになるのであるが、おそらくその前後に丹後由良駅を訪れたのであろう、その時、駅舎内で業務に従事していたのは「金閣寺」の本文によると駅長と駅員の二人だけであったらしい。突然の三島の訪問に二人の驚きは如何ばかりであったであろうか？　いやその時点では未だその来訪者が作家・三島由紀夫であることさえ知らなかった可能性が強いのである。その時、三島より五歳下の修さんは初対面の三島の目にどう映ったのであろうか。

平成十七年、この年、関東では折からの市川雷蔵ブーム。私の自宅がある神奈川県の映画館でも、春先から週変わりで次から次へと雷蔵の主演作品が上映され続けていた。その頃、横浜の山手にある神奈川近代文学館では三島由紀夫展が始まった。そしてその会場内では「金閣寺」を映画化した雷蔵主演の大映作品「炎上」も上映されることになり、私は運良くその特別鑑賞券を手に入れることができたのだ。そうなると当然、約三十年前に一度サラッと読み流したことのある原作を事前にじっくりと読んでみたい気にもなるもので、早速近所の書店に赴き「金閣寺」の文庫本を買い求めた。

それにしてもその文章は、三十年の時を経ても尚、私にとっては相変わらず難解で手ごわいものであった。手こずりながら、やっとの思いで第八章・丹後由良駅の場面に辿り着き登場する一人の駅員の様子を読み終えた時、私の視線はその句点でピタリと止まったまま、その先には進めなくなってしまったのだ。そしていきなり私の脳裏にまるであぶり出しの絵のように鮮明に浮かび上がってきたひとつの絵柄があった。

何とそれは私が幼い頃に丹後由良の駅舎内で何度も視たことのある光景であったのだ。そしてそこに登場する人物こそが、次から次へそして何から何まで駅構内におけるすべての仕事をテキパキとやってのける映画好きでひょうきん者のあの若き日のポッポ屋・修さんの姿そのも

のであったのだ。この時、小説の中の駅員と修さんの姿が私の中でピッタリと重なって同化し、それは直ぐに深い確信となっていった。「金閣寺」の本文はこうである。

丹後由良駅で汽車を待つうちに時雨が来、屋根のない駅はたちまち濡れた。（中略）陽気な若い駅員が、この次の休みに行く映画のことを、大声で吹聴していた。それは見事な、涙をそそるような映画で、派手な活劇にも欠けていなかった。

この次の休みは映画に！　この若々しい、私よりもはるかに逞しい、いきいきとした青年が、この次の休みには映画を見て、女を抱いて、そして寝てしまうのだ。

彼はたえず駅長をからかい、冗談を言い、たしなめられ、その間忙しく炭をついだり、黒板に何かの数字を書いたりしていた。再び私を、生活の魅惑、あるいは生活への嫉視が虜にしようとした。

金閣を焼かずに、寺を飛び出して、還俗（げんぞく）して、私もこういう風に生活に埋もれてしまうこともできるのだ。

三十年前に小説「金閣寺」を読み流した際はまったく気にも留めなかった駅員の存在が、まさかあの修さんだったとは、その時の驚きと興奮は今でも言葉では語り尽くすことができない。

私がその駅員を修さんだと確信したのには訳があった。私が昭和二十五年に丹後由良に生まれ物心ついた時、私の目の前には既に修さんの姿があった。私の家は修さん宅の真向かい、以来修さんからは身内の子のように可愛がってもらった。

私に映画の面白さ、酒の味を教えてくれたのは修さんであった。その当時、由良小学校生徒の夜の映画鑑賞は禁止されていたが修さんは全くお構いなく小さな私を自分のコート内に忍ばせて由良座（その当時の丹後由良には映画館が一軒あった）のカウンター前を易々と潜り抜け場内が暗くなると直ぐに私をコートから解放して、その膝の上に私を座らせて映画を見せてくれた。目の前に広がる大きなスクリーンに数々の別世界を見せられ子供心にどれほど感動させられたことか。それは当時の私にとって、とてもスリリングで掛け替えのない貴重なひとときであった。修さんがまだ独身の頃はよく修さん宅に泊まり込んだりもした。幼かった私は、ある夜オネショをしてしまい蒲団を濡らし、修さんを困らせてしまった苦い思い出もある。

たまに駅の辺りで私がひとりで遊んでいると、修さんは気軽に声をかけてくれた。そんな時、丹後由良駅は私の楽しい遊び場と化すのであった。その頃の丹後由良は今より、もっと穏やかにユックリと温かい時間が流れ、ノンビリモードの幼い私にとっては、とても心地の良い時代であった。私にとって修さんとの思い出は語れば尽きることがない。そんな私だからこそ、この駅員は確かにあの修さんだ！と強く断言できるのである。

ところが私はそのあと、いや待てよ、それにしてもそんなことは丹後由良の人々の間ではすでに周知の事実なのではあるまいかと思い始めた。そしてこの夏の休暇には丹後由良に帰り、必ずその確認をとりたいという強い覚悟で帰省に臨んだのであった。先ず確認すべきは、何といっても磯野修三夫人・睦子さんであった。

久々の帰省に笑顔で迎えてくれた夫人に私は恐る恐る、先ずは「修さんはいつから丹後由良駅に？」と尋ねてみた。やはりその答えは私が期待したとおりのものであった。そのあと「二人は昭和何年からの付き合い？」等と、私の不自然な質問攻めに業を煮やした夫人は「どうして、そんなことを？」と私に尋ねた。

私が「実は三島由紀夫の金閣寺という小説に・・・」と説明をし始めると、夫人はすぐに驚きの表情を浮かべ絶句してしまった。

夫人がそれ程、驚いたのには訳があったのだ。何とその三日前、夫人はお墓参りの際に久々にそこで出会った近所の坂本幸彦氏から思いがけない話を聞いていたのである。それは「修さんが若い頃に駅舎を訪れた三島由紀夫とのことについて、私に何度か話をしてくれたことがあった。由良では三島由紀夫と会って話をしたのは修さんだけで、その時、修さんは駅長でもないのに駅長の帽子を被り三島の前で、おどけてみせたらしい」というものであった。それを聞いた途端に、今度は私が絶句してしまったのである。偶然といえば偶然の出来事であるが、何故私が今頃になって小説「金閣寺」の中にその真実を発見し、さらには坂本氏も何故何十年も経ったこの夏にそのことを夫人に話すことになったのか、私には何か深い意味があることのように思えてならなかった。

そして今回の帰省で新たにハッキリしたことは、修さんが過去に三島と会って言葉を交わしていたことを坂本氏には告げていながら、私の知る限り夫人にもそれ以外の人物にもまったくそのことを話していなかったという事実であった。

また三島が駅を訪れているのにも関わらず、それが何のための来訪であったのかも修さんは知らなかったようだ。三島にとっては自分が小説「金閣寺」を書くために、「金閣寺の放火犯」になり切っての取材であったが故に、そして日常的な駅舎内を取材したかったがために、あえてそのことを伏せて説明しなかったのであろう。

それに昭和三十年といえば、全国的にテレビもさほど普及していなく未だラジオの時代であり、おそらく三島が丹後由良駅を訪れた時には当時の小田垣駅長（すでに故人）も修さんも、好奇心旺盛なただの通りすがりの旅の人としてもてなし、その人物が作家・三島由紀夫であることを知らなかったのではないだろうか。

そして修さんがそのことを確認できたのは小説「金閣寺」が出版された何年もあとのことで、それこそテレビがもっと普及して三島がテレビや映画に出て顔が売れ、あの独特の風貌を見る機会が多くなってからのことではなかったのだろうか。また、修さんが、坂本氏に三島との出会いを話したのもそれ以降のことだったのであろう。そしてその頃には夫人や地元の人々にそのことを話したところで、それはすでにいささか過去のことでもあり、もしかして「人違いでは？」と皆に一笑に付されるのが関の山とでも考えたのではないだろうか。私にはそんな性格も修さんらしく思えたりするのだ。何れにしても自分のことが小説「金閣寺」に書かれていることなど、当の修さんは知る由もなかったのである。

私がお渡しした小説の本文を抜粋したコピー資料を手にした夫人は、そこに登場する若い駅員が間違いなくご主人の修さんであることを、ご自分なりに初めて確認し感激され、おそらくその当時の結婚間近な修さんとの恋愛時代にも思いを馳せられたのではないだろうか。

平成18年度 人権標語入選作品

認めよう 人それぞれの人格を

由良小学校6年　日比昌也

―父の足跡を探して―（Ⅰ）

「西部ニューギニア慰霊友好親善訪問団」に参加して

三嶋昌子

ある日「こんなんが有るで」と姉が一枚の紙を差し出してくれた。「平成十八年度戦没者遺児による慰霊親善事業計画概要」と書かれてあった。実施地区が十五地区ある中にビアク島という字が目に飛び込んできた。「あった！」と思った。私の父は昭和十九年一月私が母のお腹で三ヶ月の時に戦地へと向かった。勿論私は父の顔を知らずに生まれたのである。

その年の十二月、戦死の知らせと共に帰ってきた遺骨の箱には只の木切れが入っていたと、生前母が何時も嘆いていた。そして「一度は行ってみたい」と事あるごとに言っていたのを思い浮かべていた。しかしその願いは叶うことは無かった。私は「行きたいなあ」と思った。

先ず宮津遺族会の会長にお尋ねする事から始めたが、遺族会には入っていない関係で直接申し込むようにとのお話、そこから京都府遺族会のご指導のもと、行くための種々の手続きが始まった。

すでに母は他界し情報の無い中での書類の作成には大変苦労し、又同時に未知の世界への不安と期待との葛藤が始まった。姉も誘ったが、病弱で長旅は無理との事で断念、主人の後押しを力に八月二十三日父の最期の地を見届けるため由良を出発したのである。二十三日は東京への移動。翌二十四日午後一時「九段会館」集合で結団式、全国から三十五名の同じ想いを持つ団員が集まった。靖国神社及び豪北方面慰霊碑を参拝して旅の出発を奉告、無事をお願いし明日の出発に備えた。

【八月二十五日】

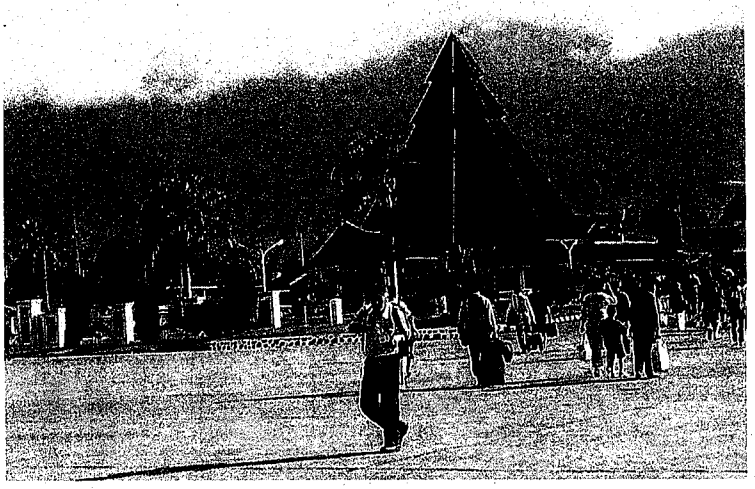
昨夜は何故か一睡も出来ぬまま朝を迎えた。東京の朝は雨降り、九段会館を朝七時三十分出発し成田空港へ。手続きを済ませて十一時二十分目的地を目指す。

日本より五千八百八十km、七時間余りでジャワ島・ジャカルタに到着した。ここでB班と別れてA班の二十二名での移動となり、その後の旅で通訳・交渉など私達が本当にお世話になった現地の「ヘイズさん」という方と合流、ここから国内線に乗り継ぐこと三回、翌朝六時四十分やっと最初の目的地である西部ニューギニア・ジャヤプラに到着した。

【八月二十六日】

飛行機を降り早朝の涼しい空気で深呼吸、ターミナルまではのんびりと散歩気分で徒歩、空港の景色は一変、椰子の木が生え抜けるような青空も南国らしい。

ターミナルに着くと日本人が着いたのを見るや、現地の男性が大勢近寄って来て、窓に顔を



8月26日朝　西部ニューギニア　ジャヤプラセンター空港

つけてこちらを見ている、異様な光景…

「荷物に注意して！」とヘイズさんから声が掛かる。空港前に止まっている車はほとんどが日本車、トヨタ・ホンダ・三菱・日産など、うち九割がトヨタ車との話にびっくり。

ここから、これ又日本車のマイクロバスだが大丈夫かと思う程のポンコツ車。「整備をすればここまで使えるか」と、皆で感心する程の車で五分、今晩から二泊するホテル「センタニインダ」へ到着した。

朝食を済ませ昨夜の疲れを癒すため午前中は休憩となった。おそらくこの地では一流のホテルに違いない。クーラーもよく冷えトイレ、お風呂も揃って広々とした部屋にはテレビまで備えてあり、大きなダブルベッドでゆっくり寝られそうだ。朝食は品数が少ないが、思ったより味は抵抗がないと思った。

平成三年からこの事業が行われ、その間に指導をしてこの味になったとの説明だった。十一時集合、早めの昼食を取っていよいよ巡拝に出かける事となった。今日の巡拝はジャヤプラ（旧・ホーランジャ）の二箇所、この地の警察官、州の役人、バスのセキュリティの人などに護衛をされホテルを出発した。

久しぶりに走るでこぼこ道、自然の風を受けながら走ること一時間半、道筋には一般の住居が転々と建っている。トタン屋根に板を打ち付けただけの粗末な家、家の側の木陰で殆ど男性が座り、涼んだり話をしたりしている。「ここは女性の方がよく働くんですよ」との説明を受ける。男性は狩に行く以外はこうしてのんびりと暮らし、女性は畑の作物つくりから家庭のこと、子育てなど忙しくよく働くとの事だった。

都市部以外は殆ど自給自足の生活で家の庭には椰子、パパイヤ、マンゴー、バナナ等あらゆる果物の木が植わっていて、それが年中何度も実るので果物は豊富にある。畑の作物も日本の夏野菜が殆ど有り、さつま芋やタロ芋も多く作られているようだった。

最初の巡拝地「ゲニム地区」に着いた。この地区では比較的立派な家の裏庭のような所、軒先二メートルも離れていない庭先に墓標が立っていた。二本の古い杭に穴の空いたヘルメットが被せてあるだけの墓標。

見るなり何とも切なく涙があふれた。その前に皆で祭壇を設け関係者三名が持ち寄ったお供物と現地で調達した花と果物をお供えし、慰霊祭をした。三名が追悼文を読み上げここまで会いに来た事を報告。それぞれの父を偲びながら読経の中皆が順番に焼香をした。

うっそうとしたジャングルの中、どこから来たのかと思う程廻りを子供達や大人が囲んでいるのに驚いた。そこから引き返し又一時間半、次に戦時下日本軍が造ったというセンタニ飛行場跡へ。

広々とした草原の中に土を硬く固めた場所が転々と見え、かろうじて飛行場跡と分かる場所。大きな木が二本立っている滑走路脇で慰霊祭をした。

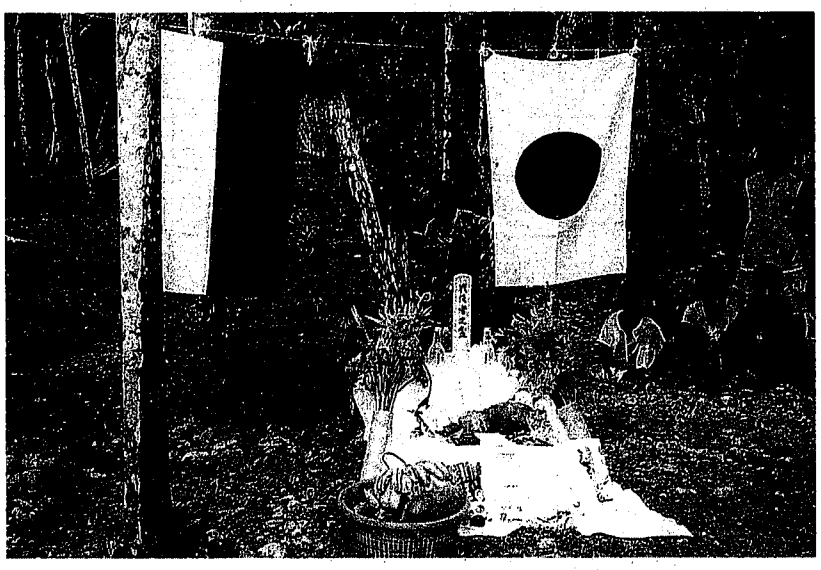
一日目の巡拝を終えてホテルに帰りニューギニアでの初めての夜となった。夕食を済ませ、部屋へ戻ろうと薄暗い廊下を歩きながら「一人では怖いなあ」と思った。添乗員さんにもノックをされても絶対キーを開けないようにと念を押された。

さて部屋の鍵を開けようとしていると横から「ジュパン？」という声が聞こえた。驚いて声の方を見るとスラッと背の高い肌の色は黄色人種、顔かたちはインドネシア人の女性が近づいてきた。私のびっくりした顔を見たその女性は「日本語余り上手く無いよ」と言った。「いや、お上手ですね、そう日本から来

ました」と私が答えると「私のお父さんニッポン人よ、お母さんはインドネシア人、三年前お父さんは死んだけど。日本語を聞いたら懐かしく思って」と言った。そして日本語はお父さんに教わったとも言った。

私の部屋から斜め前の部屋に宿泊し、家族で休暇を楽しんでいるとの事で子供達の元気な声がしていた。こんな出会いがあるのかと思うと同時に「ひょっとして」と思い、「お父さんの名前を尋ねようか？」と一瞬思った。しかしもう亡くなっているのに今更、と思い躊躇した。戦後日本に帰還することも出来ずここで過ごすうち、現地の女性と巡り合い結婚した人があっても不思議ではない話だと思った。

しかしそれを尋ねることも出来ずに別れた。もしそうだとしてもこうして休暇を楽しむ生活をしていると思うと何故かホッとした気持ちになった。これも何かの縁なのかなと考えながらシャワーを浴び、二日分の寝不足がたたって直ぐに夢の世界へ…。

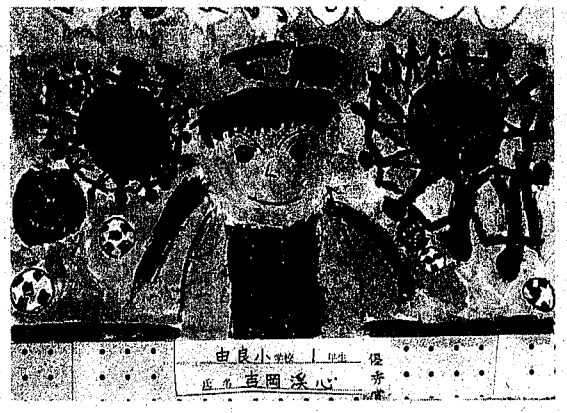


8月26日　西部ニューギニア　ゲニム地区巡拝

平成18年度 人権市民の集い

人権ポスターの部優秀賞受賞

由良小学校一年　吉岡渓心



おことわり

・前号（128号）P16「いわき市金山地区」との交流、山下憲弥氏の文中二段目三行目、いわき市……は、『いわき市金山地区の伝説については遠藤会長より、丹後由良地区の伝説については私より紹介した』が正しく訂正してお詫びします。

編集後記

前号では紙面の都合上、四方俊一氏「経ケ岬から潮岬まで（最終回）」、大森孝氏「戦時中の青春」、山下憲弥氏「蜂子皇子」について掲載できず、改めてお詫びいたします。

平間氏「ポッポ屋修さん」について一月十九日朝日新聞に関連記事が載りました。

また、今回、三嶋昌子さんから父を偲ぶ原稿が寄せられました。三回位に分けて連載の予定です。

今回の「公民館だより」発行で平成十八年度公民館行事は終了します。一年は本当に早く過ぎていきますが、皆様からのご支援ご協力に厚くお礼を申し上げます。

部員一同、皆さんに感謝しながら少ない予算を有効に活用し、内容の充実に努めてまいります。（飯澤）

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。